

奈良時代の須恵器について

—計測値による杯類の再検討—

中沢 悟 飯田 陽一

1 はじめに

本稿は8世紀代の須恵器杯類を操作することによって、編年作業の指針の一つを作り、群馬県内の杯類に見られる地域相を示すことを意図したものである。集落出土の資料を中心に操作を行ったが住居出土の土器総体について検討を加えたものではなく、編年作業そのものを目的としたものでもない。⁽¹⁾ 該期の土器についての分析は井上唯雄氏以来数多くの取り組みがあるが、それらに言及するものではなく、共通の基盤と再検討の方法を探ろうとするものである。

群馬県内の歴史時代の土器を概観する時、時間差とともに地域差の生じていることも考慮しなくてはならない。窯跡資料の不充分な現時点では、須恵器の変遷についても集落出土の資料より推測を重ねるより方法はなく、主に国府域周辺の様子を示すと考えた群馬町保渡田東遺跡と、⁽⁸⁾ 東毛の大集落である境町三ツ木遺跡の住居跡資料を中心に検討を行った。⁽⁹⁾ これにより群馬県内の東西両地域の大まかな比較が可能と考えたからである。さらに北部の状況を簡略に記すため、月夜野町村主遺跡の住居跡出土資料を中心に一部を付け加えた。

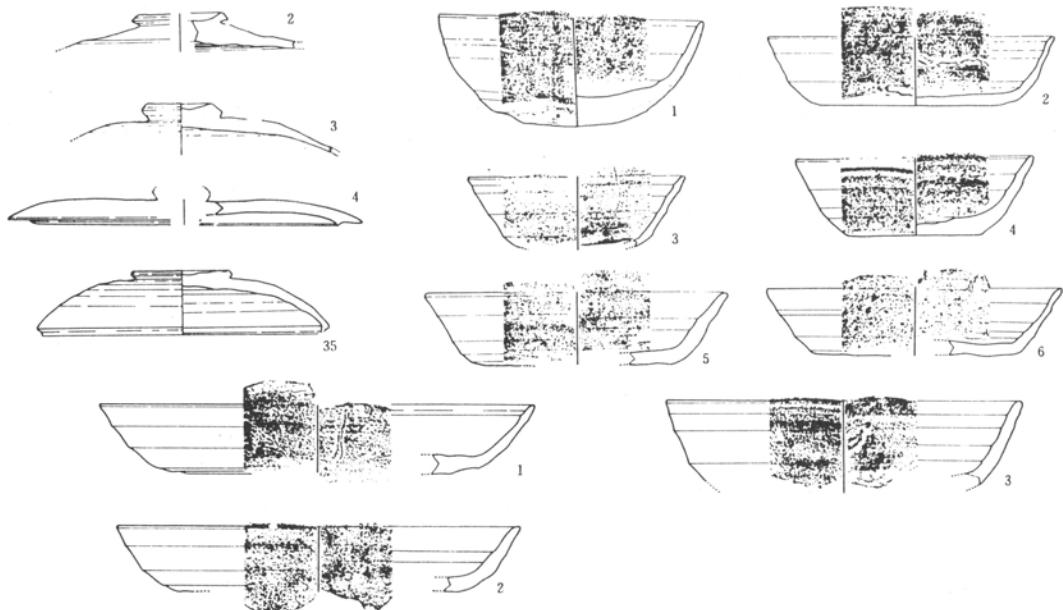
なお、ここで使用した埼玉県下の資料についての年代観や分析の方法については、昨年12月に行われた埼玉県考古学会の討論「奈良時代前半の須恵器編年とその背景」の準備中に、金子真土・酒井清治・渡辺一氏からの教受によるところが大きい。また群馬県内の資料収集とその位置付けについては大江正行氏より多大な助言を得ている。図版の作成にあたっては、蜂須滋美・鈴木紀子氏を煩わせた。

2 群馬県内の奈良時代須恵器についての概観

現在刊行されている奈良時代の須恵器窯跡の発掘調査の資料は極めて乏しく、吉井町・月夜野町・大胡町等があるにすぎないが、⁽¹⁰⁾ 現在調査中や整理中のものや採集資料などをあわせると、⁽¹¹⁾ 県内の須要器窯の概要は既に知られている。

これらの窯跡を地域別に捉えると、大まかには三つの地域に分けることができる。西毛には安中・藤岡・吉井等の広い地域に多くの窯跡群があり、関東地方でも有数の窯業地帯を形成している。ここでは西部の窯跡群と呼称する。東毛では大胡・新里等の赤城山南麓から太田・桐生に至る広域に小規模な窯跡が見られる。太田金山を除いては操業年代も短いようである。ここでは東部の窯跡群と呼称する。また、北部の窯跡群としたのは月夜野に中之条を併せた県北の諸窯跡で古墳時代末に操業を開始したと考えられる新しい生産地である。

第1図は吉井町末沢1号窯跡の資料である。一時期の土器群として捉えるには問題もあるが、



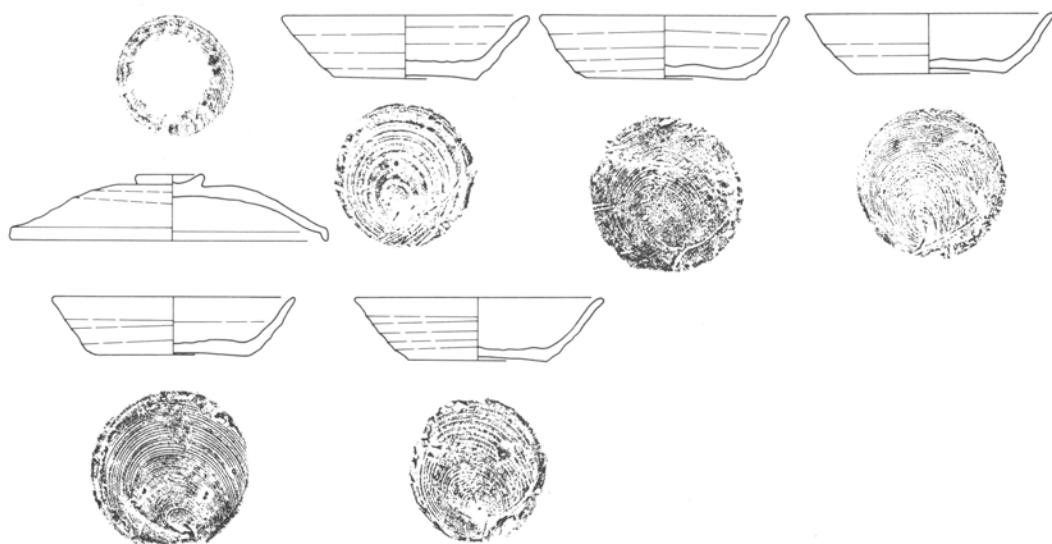
第1図 末沢1号窯の須恵器

蓋にカエリを持つものと持たないものが出土していることが特徴的である。第2図は松井田町愛⁽¹⁸⁾后山4住出土の杯類で、大まかには安中市秋間窯跡群の製品と思われる。すべて回転糸切り後無調整である。西毛における集落の須恵器の大半は西部の窯跡群で作られたものと思われるもので、奈良・平安時代を通じて出土数もきわめて多い。第3図の大胡町八ヶ蜂窯は東毛の調査例を代表するものの一つであるが、須恵器自体は一般的なものではない。東部の窯跡群の製品にはヘラ切り跡を残す土器が後代まで続くことが特徴となっている。生産量が少ないことは集落出土量に表れ、他地域の窯跡群からの搬入品が比較的に目立つ地域となっている。またこの傾向は平安時代になっても継続していく。第10図は月夜野町の住居出土資料で、窯跡群に近接して立地する遺跡でもあるが、須恵器の多い地域として捉えられる。

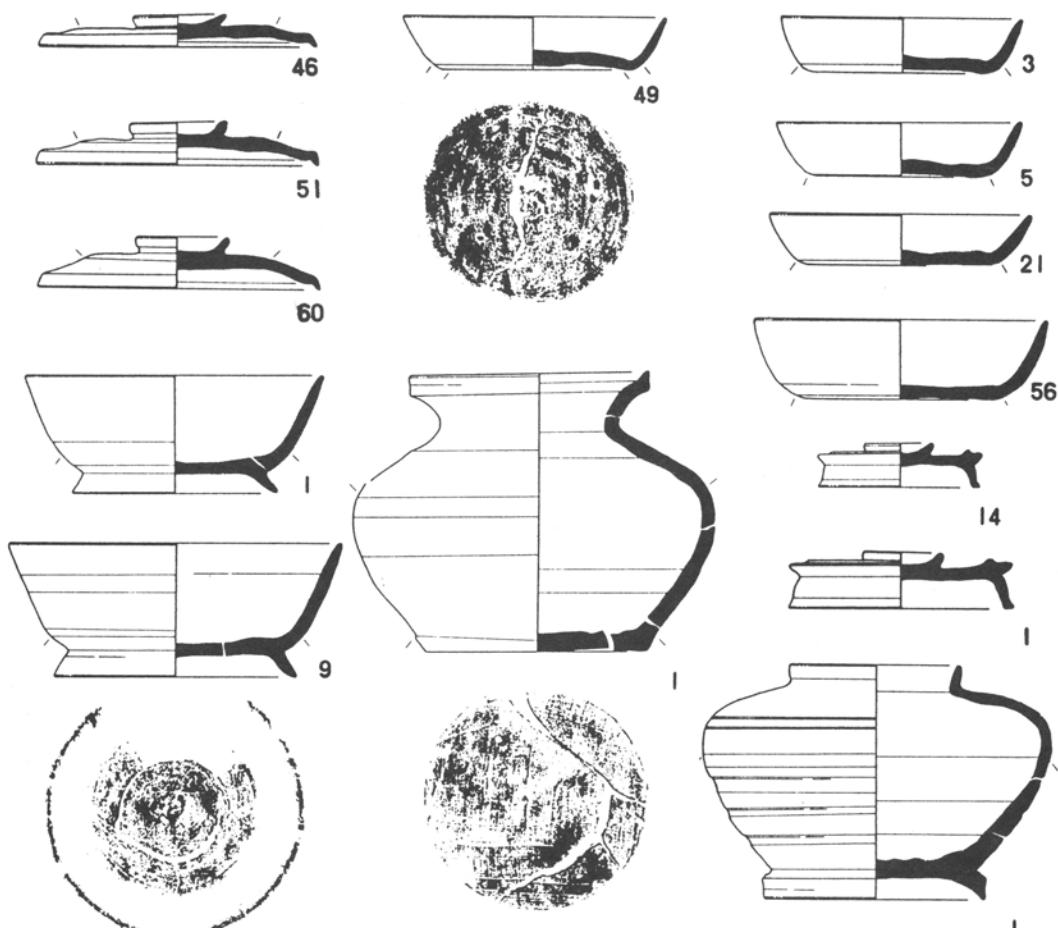
須恵器が地域性を示す例のなかで、群馬独特の器形を持つ杯類・蓋類として注目できるものに、環状つまみがあつてカエリを持つ蓋がある。埼玉の須恵器研究の過程からこれらが群馬県を中心とする土器との指摘があり、西毛・北毛では出土例が顯著だが東毛では少ない。また削り出し高台の杯類も独自の器形であり、広範囲に分布する特徴的な土器といえる。この土器も西毛・北毛に比べ東毛での出土が著しく少ない。⁽²⁰⁾ 以上の須恵器の組み合わせである環状つまみとカエリのある蓋に削り出し高台の杯というセットを、上野国府周辺のスタイルと呼べる顯著な様相を指摘できそうである。保渡田東6区6住等に見ることができる。

この他に第2図右下にあるような天井縁辺部に突帯の巡る骨蔵器があり、三つの地域の窯跡群のすべてで生産が確認されているが、本稿の主旨にそれるのでここでは扱わない。

杯類の底部切り離し技法と再調整の手法には県内での地域差が看取でき、西毛と東毛の顯著な差異として捉えられる。東毛の窯跡資料には不明な点がきわめて多いが東毛の集落には8世紀代



第2図 愛后山4住の須恵器



第3図 八ヶ峰窯の須恵器

を通じてヘラ切り跡を残す杯類が多い。また北毛でも糸切りとヘラ切りの杯類が混在している例が多いようである。西毛では8世紀後半代から回転糸切り無調整の杯類が主体となり、他地域で見られるほどヘラ切り杯類は多くない。また底部周縁部を調整する杯類の出土もやや少ないようであり、この傾向は北毛でも認められる。

3 検討作業の定点となる資料について

(1) 埼玉県比企丘陵の窯跡資料について

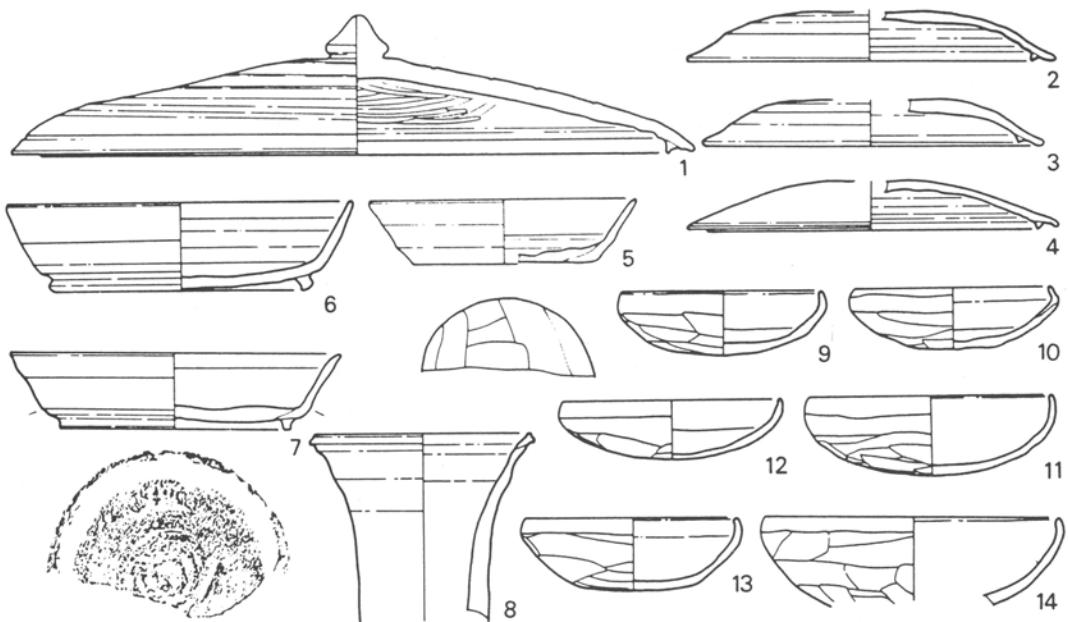
山下6号窯の製品は8世紀の初頭の年代観を与えることが提唱されている。⁽²³⁾これについて検討を加える県内資料を持ち得ないが、口径15.5~17.5cmという共通して杯類が大型化する段階として明らかな特徴を持ったメルクマークと指摘できよう。群馬県内の資料からもこの様相を持つ一群の存在が指摘でき、平行関係を摘出できる。

前内出窯跡の杯類は底部調整手法の検討や計測値の分析等、関東地方の須恵器研究の道標となつた資料である。⁽²⁴⁾前述の討論で主催者埼玉側のコメントーターから8世紀の中葉の年代観が提唱されるなど、位置付けは流動的な点もある。⁽²⁵⁾2つの窯の資料からは大小の杯類の小型化の過程が看取出来ることは以前から指摘されてきた。両窯跡の主体となる小型の杯類の場合、口径は11.6~13.3と12.5~14.6となりバラつきが目立つ。⁽²⁶⁾底部には再調整されるものが多く、内面の立ち上がりに滑らかさがない等、古式の様相を残した一群として捉えるべきと考えられ、埼玉側の提唱には傾聴すべき点が大きい。

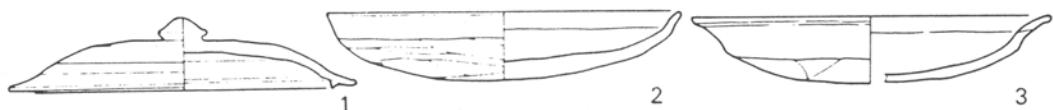
八坂前窯跡は9世紀中葉の武藏国分寺塔再建瓦を製作した窯として知られているが、瓦生産に先行して須恵器が焼成されていたことが知られている。⁽²⁷⁾中でも4号窯跡の窯床面出土遺物は焼台として使用されたと考えられている杯類で、9世紀前半代の遺物中でも古い段階まで遡ることも検討すべき一群である。口径12~13cm、器高3.5cm前後の計測値でまとまりがある。口縁端部は若干肥厚気味あるいは外反気味となっている。

(2) 群馬県内の定点となる資料についての検討

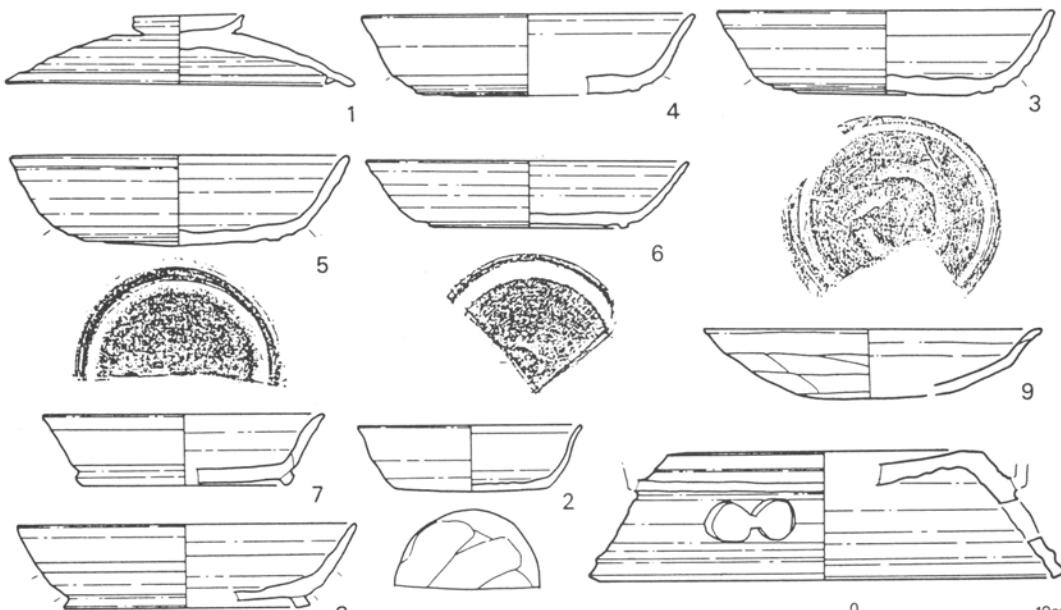
前述の愛后山4住出土の土器は万年通宝(初鑄 760年)との共伴が注目され、編年作業に使用されることの多い土器である。須恵器杯類はいづれも糸切り無調整の底部であるため、8世紀末から9世紀前半代の年代観が付与されることが多い資料であるが、口径13cm、器高/口径が0.25という計測値からはやや古いプロポーションが読みとれる。これらは火災住居の一括遺物であり鉄製工具の共伴などから火災による往時のパックされた資料として著名であるが、古銭についても埋納資料などと比べて製作→廃棄までの時間幅の制約の弱い遺物と考えられよう。古銭の年代を引用する際の危険性は当然指摘されようが、この住居の遺物は好条件に恵まれた資料の一つである。杯類は表1で示したように計測値のまとまりが著しく、窯跡から一括搬入されて、生産から廃棄までの時間を考慮する必要の少ない資料とも言えよう。さらに、極めて規格性の高い土器生産が搬出先の集落で確認出来たものと考えられる。愛后山4住の須恵器杯類は八坂前4号窯の



保渡田東 7 区 6 住

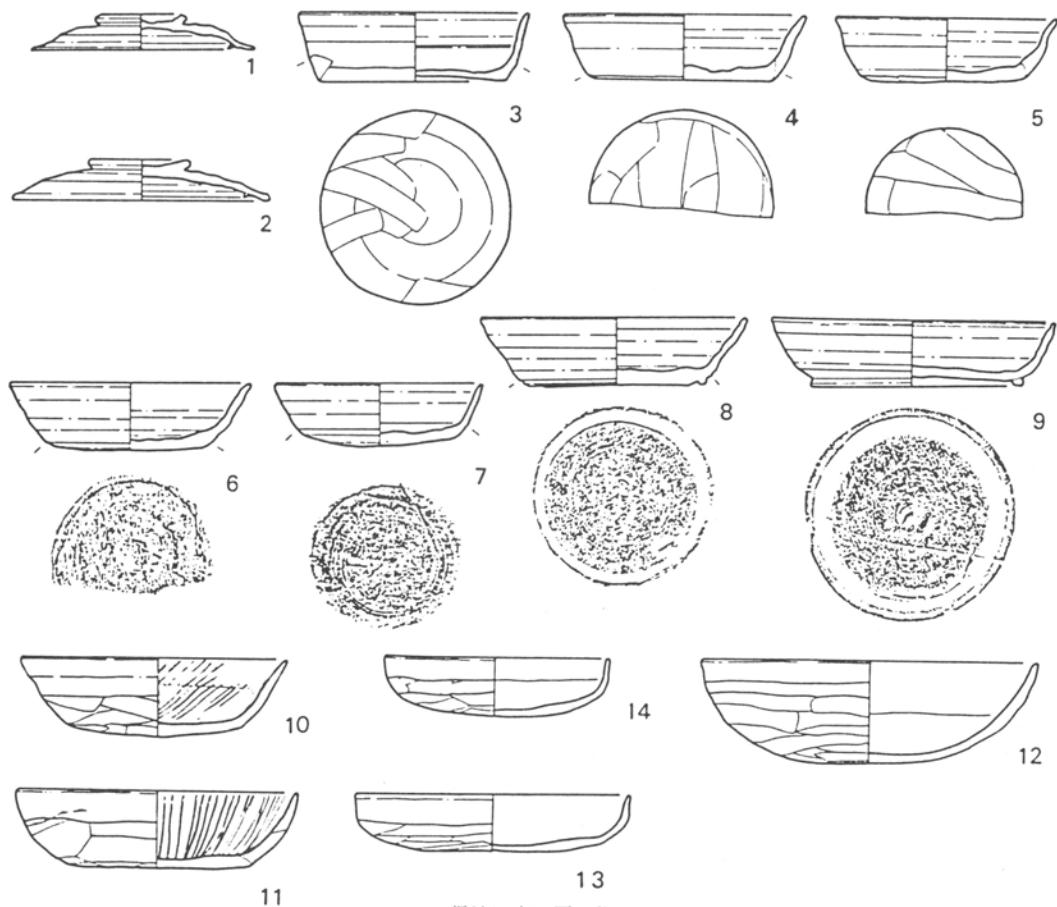


保渡田東 6 区 10 住



保渡田東 6 区 6 住
第 4 図 西毛の土器(1)

0 10cm



保渡田東5区5住
第5図 西毛の土器(2)

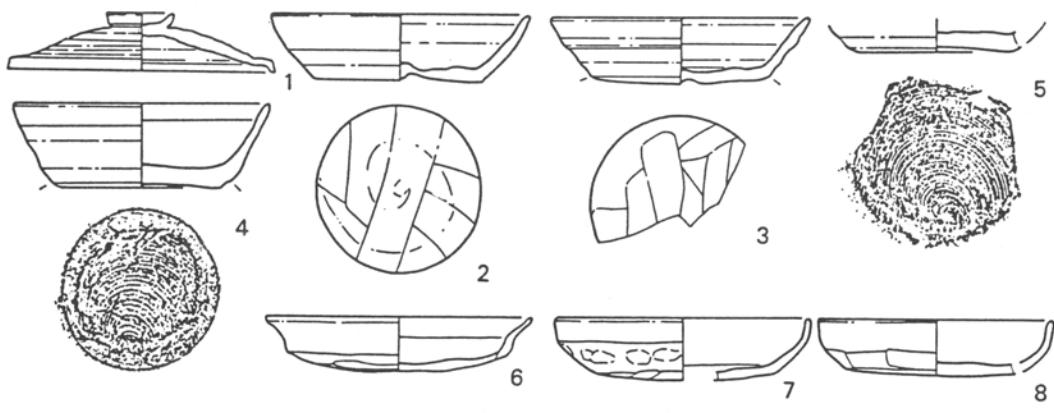
杯類よりやや大型で偏平で、より古式の様相は明確であり、前内出窯の杯類にむしろ近い点も見出せる。口縁端部の外反傾向や内面の滑らかな立ち上がりなどに前内出窯に後出する点が認められ、よって万年通宝に近い時期を想定して埼玉提唱の年代観の補強としたい。

4 集落出土の須恵器杯類の検討

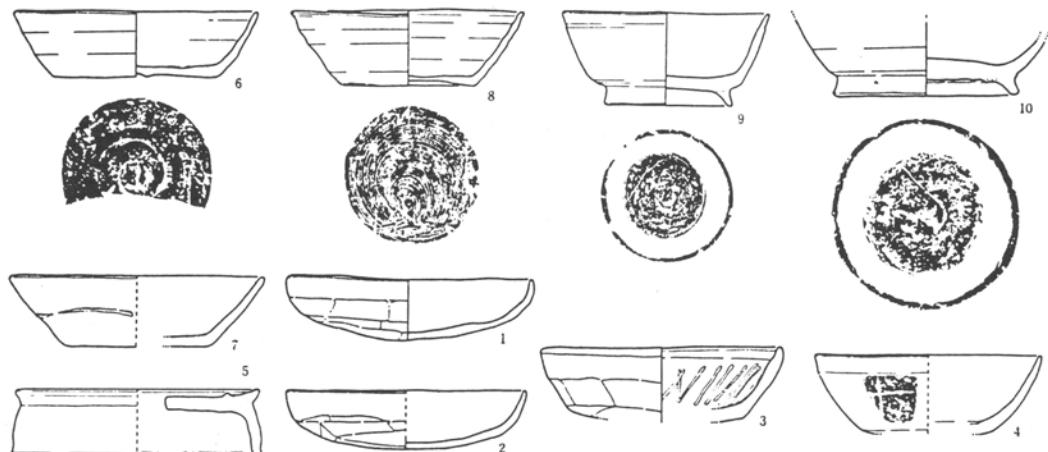
ここでは前述の資料を操作の基点として、須恵器杯類の計測値による検討が8世紀の土器の年代観把握への有用性を試みるものである。ここまで示したように、窯跡資料でさえ計測値の幅は大きいのに加え、僅かな集落資料から現在土器に求められている詳細な年代観を得ることの限界を承知の上で、県内出土の須恵器杯類に再検討を加えてみた。計測値に口径と器高を用いるのは、金子氏の指摘に沿ったものである。

(1) 保渡田東遺跡を中心とした西毛での分析

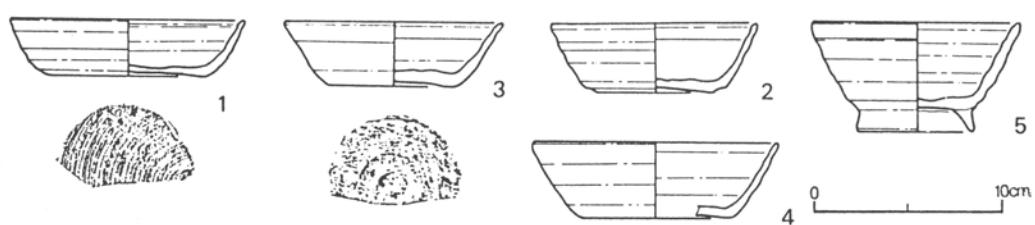
保渡田東6区6住は大型の杯類を中心とする段階として捉えられる。表1に示すように、山下6号窯より僅かに大型の杯類であり、若干先行する要素を持っている。口径12cm前後の小型杯を



保渡田 7 区 3 住



鳥羽 I 区 36 住

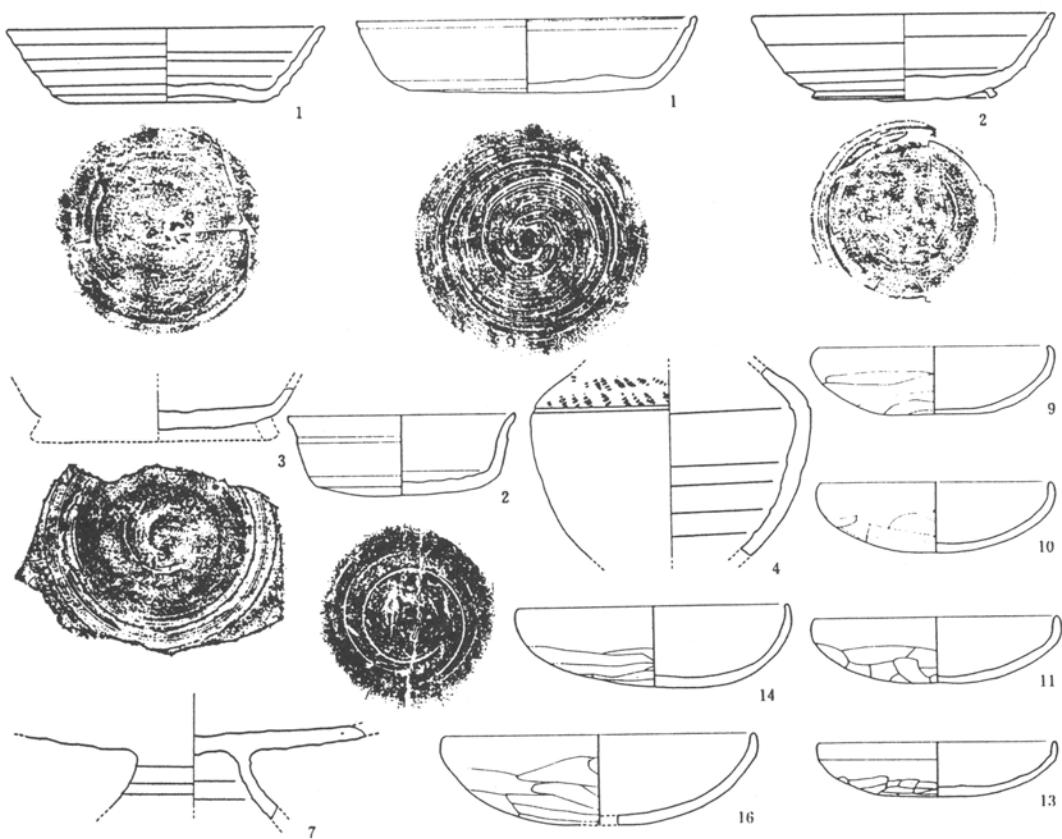


保渡田 3 区 2 A 住

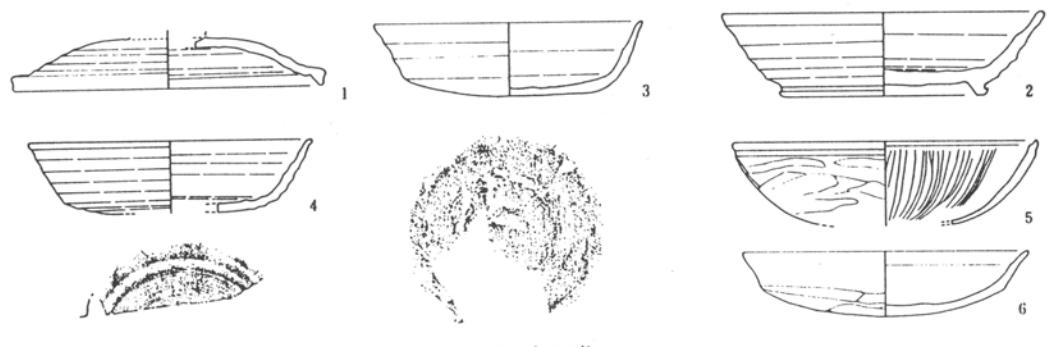
第 6 図 西毛の土器(3)

ともなっている。7区6住・6区10住も同時期のもので、バラエティーに富んでいる。

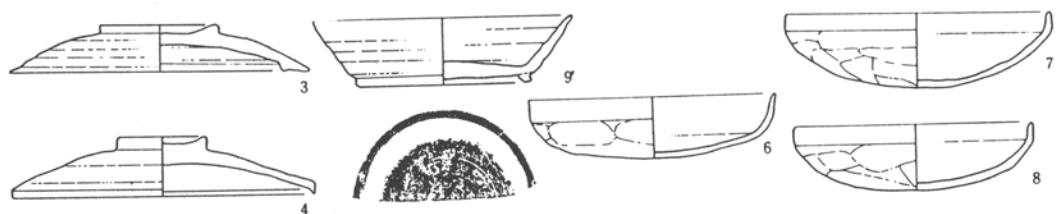
保渡田東5区5住では前代のセットのうち大型杯類が口径15cm程度に小型化した段階である。カエリのある蓋や削り出し高台の杯がこの時点まで明瞭に残っている。東北地方と埼玉県で共通して見られた法量変化がそのまま群馬県でもあてはまる。なを前述の末沢1号窯も主体となる杯類の口径が15~16cmとなり、5区5住と同時期もしくは若干先行するものと位置付けられるが、蓋のカエリの有無は両者併存しており、この時期の特徴と捉えられよう。



三ツ木118住



三ツ木233住



小角田前83住
第7図 東毛の土器(1)

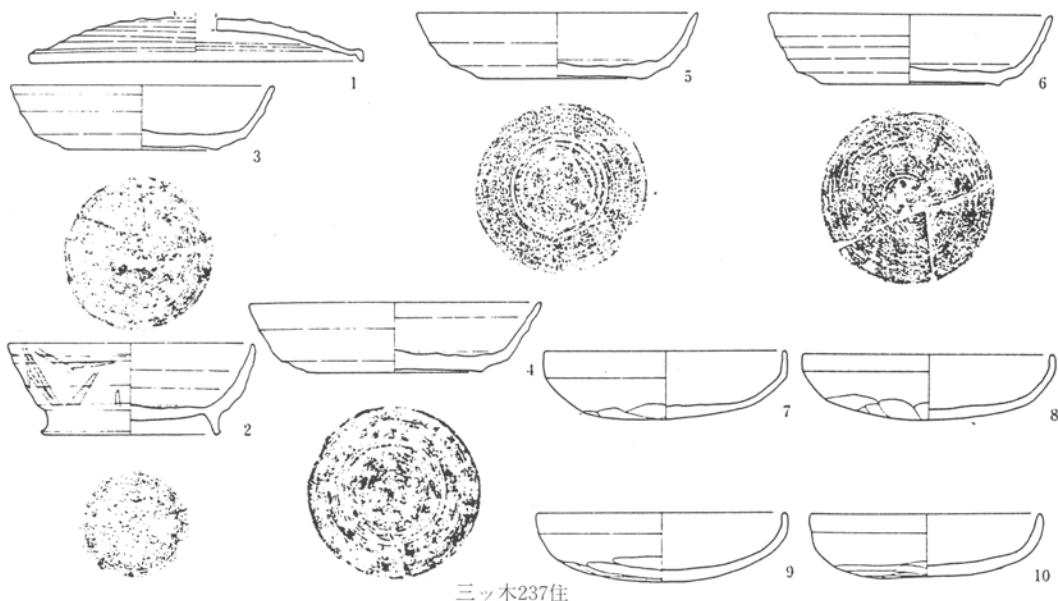
保渡田東7区3住は、計測値からも成形技法からも愛后山4住に先行する段階であろう。杯類の口径は14cm前後で、底周辺に再調整を施す例がある。

8世紀終末段階を充当する明確な資料には恵まれなかつたが、前代の杯類が更に小型化し、八坂前4号窯に先行するものとして保渡田東3区2A住がある。地点は異なるが群馬町鳥羽遺跡I区36住も同時期のものであろう。杯類の口径は11~14cm前後と幅が広く、前代までのまとまりは見られず、不明瞭な点が多い。特に西毛地方で前代に少なかったヘラ切り無調整の杯の出土が増加する傾向を示しているようである。生産地もしくは流通経路の変動も予想され、この時期の土器を一層複雑にしているものと想定している。⁽²⁸⁾

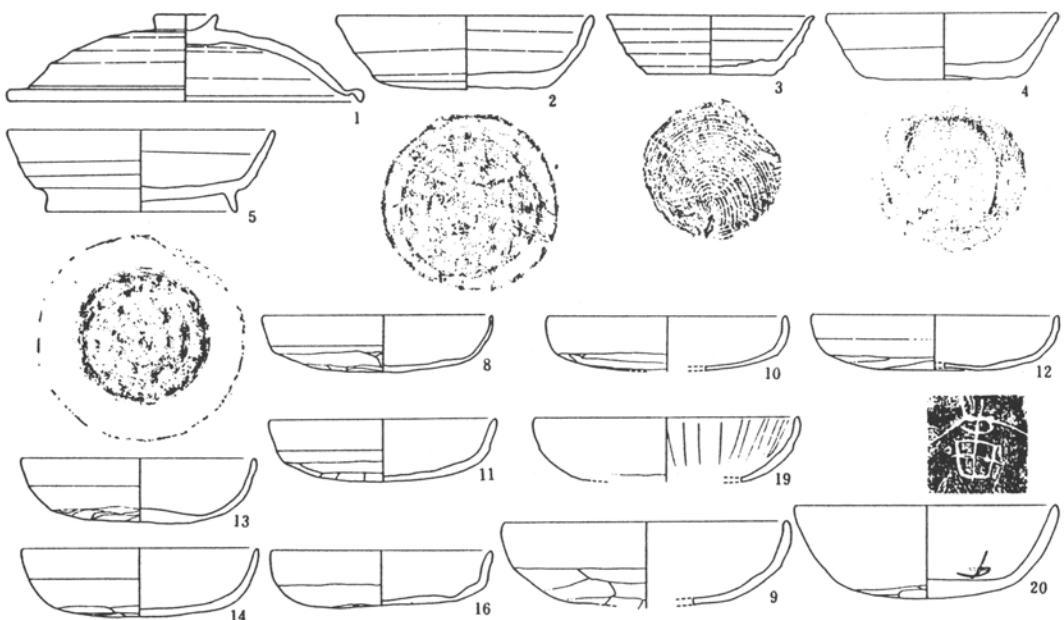
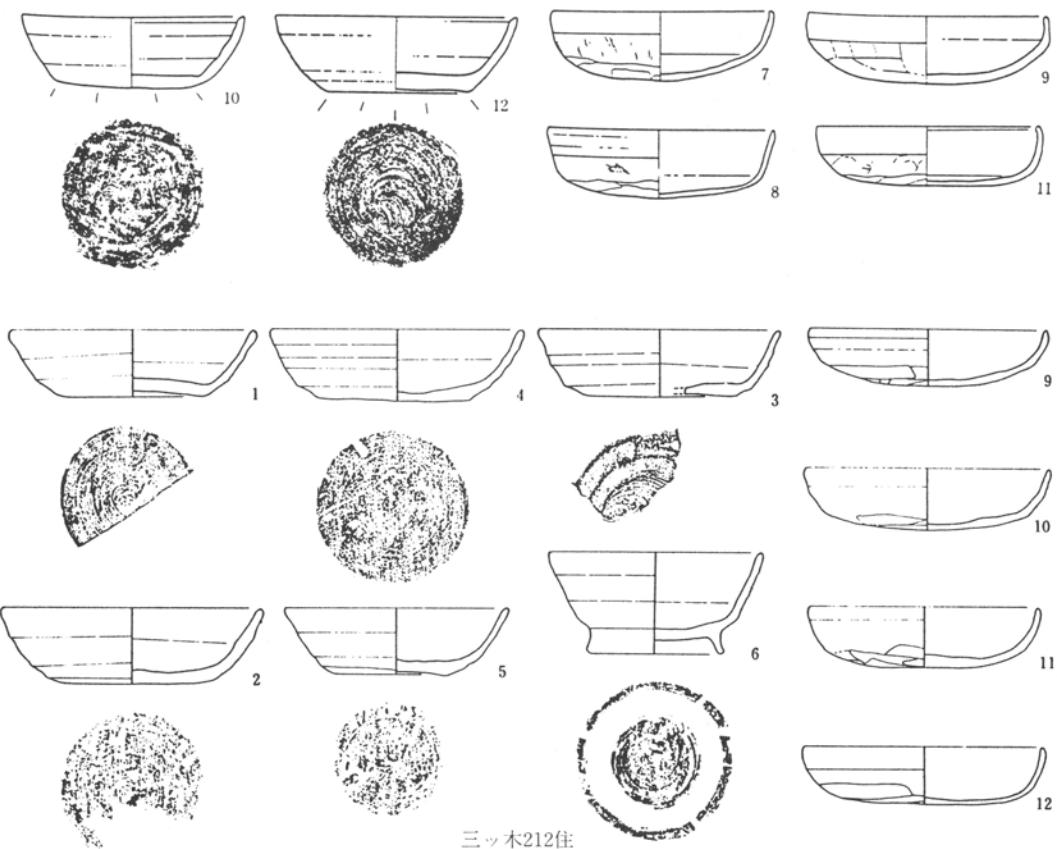
(2) 三ツ木遺跡を中心とした東毛での分析

山下6号窯に併行するものとして、8世紀初頭に位置付けられるのが三ツ木118住である。口径17cmに達する杯類を主体として、口径12cm前後を伴っている。計測値では西毛で保渡田東6区6住に見られたのと同一の様相が看取できるが、杯類は平底が主体で特に削り高台の杯は少ない。また、三ツ木233住にあるようなカエリのない蓋が多数検出出来る事など、西毛との差異は大きく、山下6号窯に極めて近い様相が指摘出来る。

三ツ木237住の段階では大型の杯類が口径15cmと小型化し、118住に後続するものと位置付けられる。器高/口径も0.24前後とまとまりがある。保渡田東5区5住と同様の計測値を示すが、前代同様平底の杯が主体で、削り高台を出土する西毛との差異は依然大きい。なを地点は異なるが尾島町小角田前遺跡の83号住にはカエリの有無では両者が出土しており、群馬県の特異性を広範に確認できる。⁽²⁹⁾

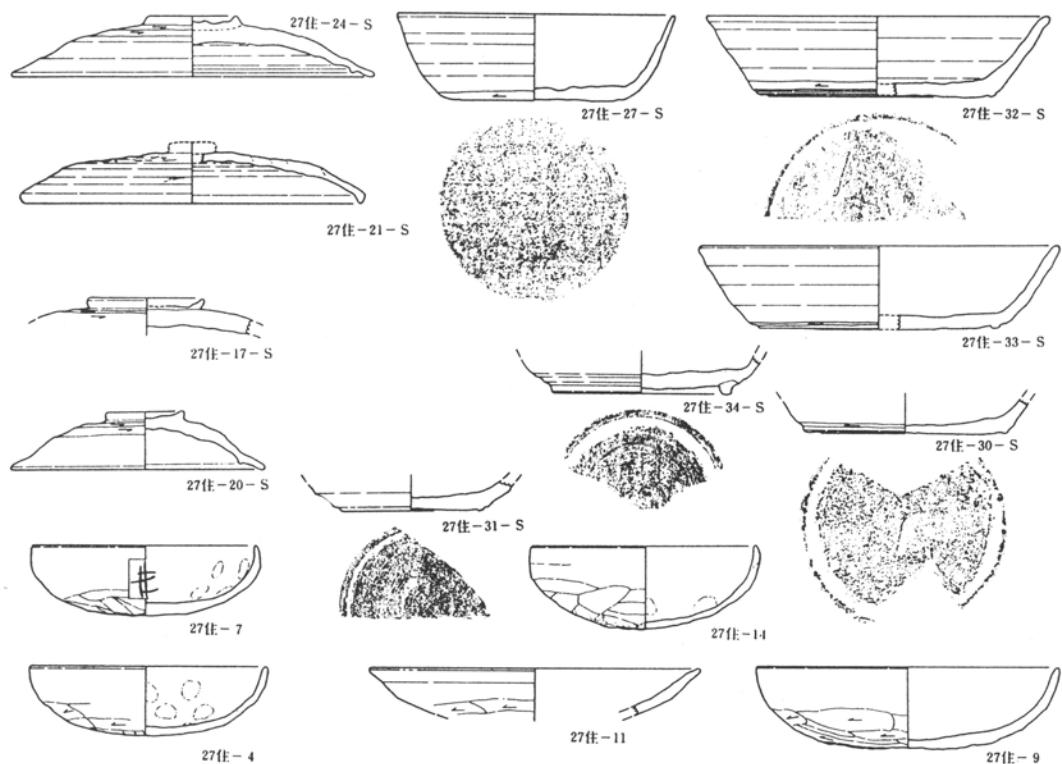


第8図 東毛の土器(2)

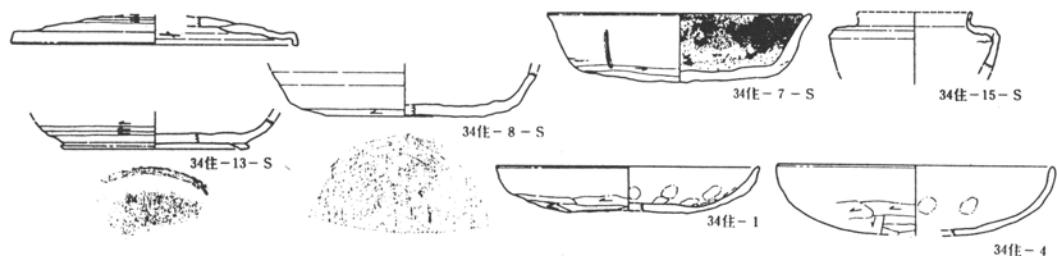


三ツ木185住

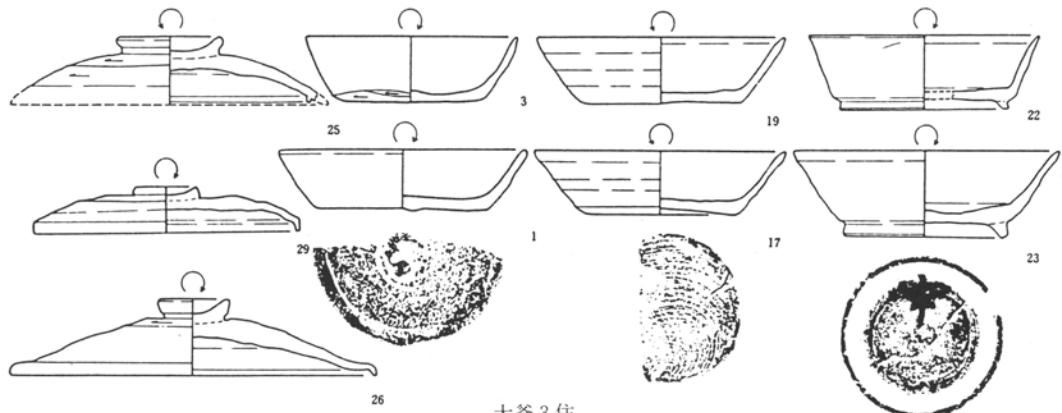
第9図 東毛の土器(3)



村主27住



村主34住



大釜3住
第10図 北毛の土器

東毛での須恵器の変遷を追うには、従来言われてきた底部調整技法の簡略化を規則的に辿ることができそうである。三ツ木212住のように口径13cm前後の小型の杯が中心となる段階に回転糸切り後、周縁部をヘラ削りする例が見られる。小角田前104住の例は更に小型化した杯に同様の手法が見られる。また、ヘラ切り無調整の杯も共伴している。なを比企丘陵産の須恵器杯類が確認出来るのもこの段階である。

三ツ木185住にも保渡田東3区2A住と同じように口径にまとまりのない小型杯類を主体とする八坂前4号窯以前の様相を持つ一群が認められる。

(3) 村主遺跡を中心とした北毛での検討

最後に県北部の様相を簡略に概観したい。この地域での8世紀代の須恵器の特徴は西毛に近い様相が看取できるようである。ここでは須恵器の胎土は近似しており、他地域からの搬入は少なかったようである。口径17cmを越す大型の杯類の時期に蓋はカエリのあるものが主体となっているが、村主27住のようなカエリのない例も確実に存在している。同様に削り高台の杯が主体であるが、付け高台も共伴している。そして村主27住→村主34住→大釜3住と杯類が順に小型化していく傾向を辿ることができる。⁽³²⁾ 大釜遺跡では成形時の回転方向と底部の切り離し技法に特徴があり、ヘラ切りの底部の土器は左回転、糸切りの底部の土器は右回転のロクロで成形されるという⁽³³⁾ 独特の様相が指摘されており、狭い地域でも須恵器生産体制が複雑であることを示唆している。

5 8世紀代の杯類の特徴と問題点

以上のように8世紀代の須恵器杯類については、前半代に計測値に関して県内全地域に及ぶ共通点が指摘できた。全国規模で見られる杯類の大型化は、口径17cm以上という顕著なものとして捉えられ、15cm前後への小型化する規則的な変化がみられた。しかし削り高台が多く、平底の少ない西毛と、平底を主体とし、削り高台の稀な東毛との間では差異が認められた。蓋類にも環状つまみにカエリを持つ独特の器形が西毛に主体があるとの感触を得た。これらの様相を通じてカエリのある蓋が8世紀の第2四半期まで残存しているという群馬県の特徴がみられる。

従来の編年指標として底部の調整手法は大きなメルクマールであった。ヘラ切りから糸切りへという変化が必ずしも時間差を表さないことは既に関東の各地で指摘されているが、この傾向は今回取り上げた地域全てで認められ、8世紀後半代の特徴となった。底部の再調整手法の変化は東毛で見られたほどに西毛では顕著な特徴とはならない可能性がある。底部周辺に見られる調整を施した土器が少ない上、表16・17で示したように保渡田東例ではやや大型の段階のみであるのに対し、三ツ木例では口径13cm前後の愛后山4住に近似したプロポーションの段階にまで周辺部のヘラ削りが認められる。

6 問題点と今後の課題

ここまで須恵器杯類の計測値を中心にして分析を進めてきたが、計測値のみによって8世紀代

の土器の消長が言及できるとは考えていない。律令制下の土器生産が受注生産と呼べるような体制下にあり、大きな制約下にあったと仮定した上で、計測値は発注側の最大の要件の一つであったと考えたものである。しかし土器を検討する上で計測値が器形に優先できる尺度でないのは自明のことである。保渡田東3区2B住のように9世紀代の杯であるが計測値からは8世紀前半の土器群と同一のものとなるような例は多数あり、それらについては当初から検討の対象とはしなかった。8世紀前半代の特徴として杯類内面に見られるぎこちない立ち上がりや、9世紀代の特徴である口縁部の外反傾向などがこれにあたる。計測値に広い地域で共通する変化が見られた8世紀中葉までと、計測値では細かな変遷が追い難い8世紀末との差異を生じた背景から、画一的に小型化する傾向を辿った段階と、法量が安定し変化に乏しくなる段階との画期を想定できる。

糸切り、ヘラ切りの差として表れる製作技法や、付け高台や削り高台に見られる器形の差・蓋のカエリの有無などは地域差につながると思われる差異であるが、それを越えて年代に共通する計測値が得られるのは、土器の大きさに発注者の意を大とする8世紀代の特質を見出せるものと考えている。

僅かな資料から推測に推測を重ねることとなった。再三述べたように計測値は土器の観察の一侧面に過ぎず、これにたよりすぎた分析が片手落ちであることは承知のうえであるが、主観的な観察による分析に偏って、研究者相互の検討の障壁を取り除く一助となることを切望する。特に検討の共通基盤となる山下6号窯・前内出窯、八坂前窯等について、どの遺物が平行する土器であるか、どの特徴をもってそれらの資料と比定するのかを共通する認識とした上で検討を始める

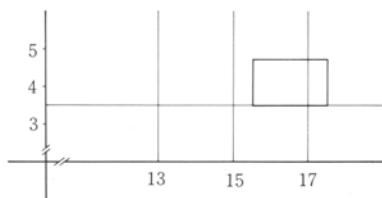


表1 山下6号窯 (34)

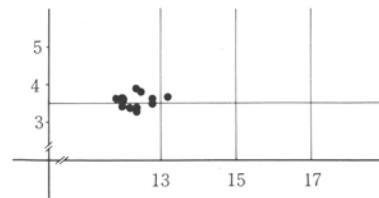


表3 八坂前4号窯

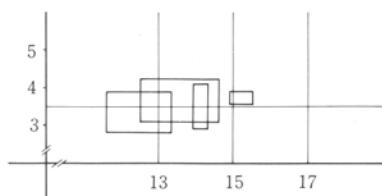


表2 前内出窯

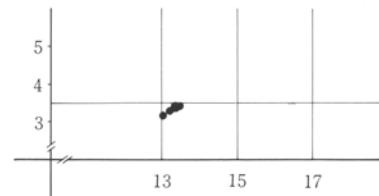


表4 愛后山4住

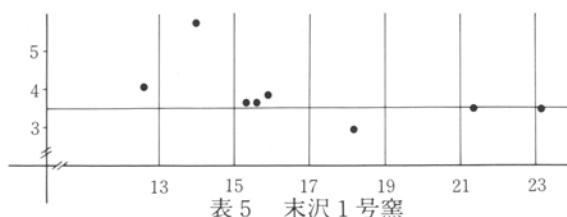


表5 末沢1号窯

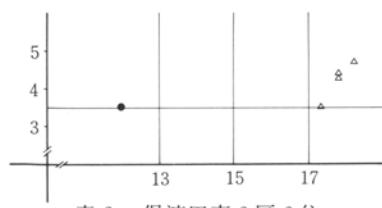


表6 保渡田東6区6住

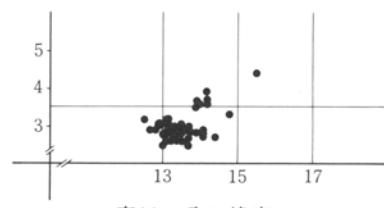


表11 八ヶ峰窯

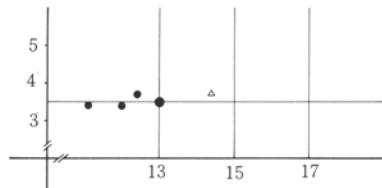


表7 保渡田東5区5住

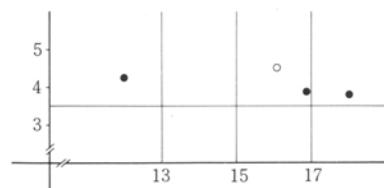


表12 三ツ木118住

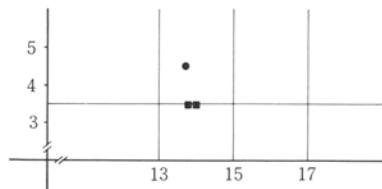


表8 保渡田東7区3住

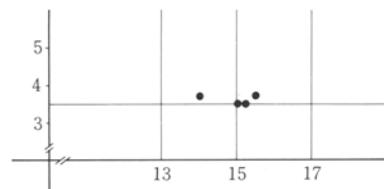


表13 三ツ木237住

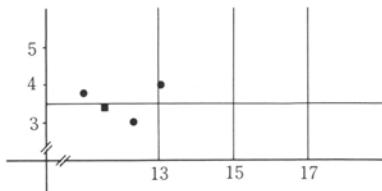


表9 保渡田東3区2A住

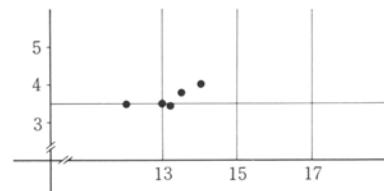


表14 三ツ木212住

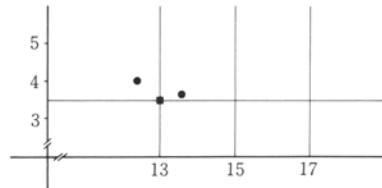


表10 鳥羽I区36住

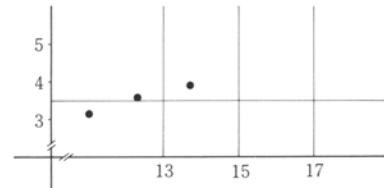


表15 三ツ木185住

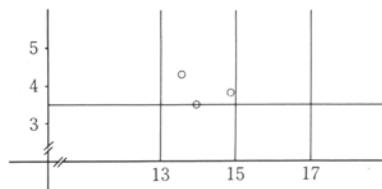


表16 保渡田東底部周辺調整杯

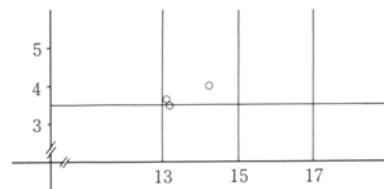


表17 三ツ木底部周辺調整杯

ことが急務と考えている。

窯跡資料の増加と、確実な産地の識別方法が確認されることで、古代の土器の流通を探る大きな手掛りとなるものである。土器の編年にのみ気を配るだけでなく、今後の分析に備えた観察方法が認識されなくてはならない。特に埼玉や東海地方等からの搬入土器を摘出する作業を済ませないと、群馬県の須恵器を分析しきれない。今回の検討のなかでも、埼玉からの搬入須恵器が混入した恐れは大きい。

また、ここでは須恵器のみの計測値の検討であったが、土師器杯類の検討を併せて行うことでの須恵器と土師器との相互の影響や、発注者の性格を求めることが出来ると予測して今後の検討の進捗に待ちたい。

註

- 1 井上唯雄 1978 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』8
- 2 井上 太 1981 「古墳時代から平安時代の土器について」『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』 富岡市教育委員会
- 3 細貫綾子 1983 「出土土器の分類と編年」『有馬条里遺跡』 波川市教育委員会
- 4 井川達雄 1985 古墳時代・奈良時代の土器について』『三ツ寺III遺跡・他』 財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24
- 6 中沢 悟 1986 「出土土器の分類と検討」『大原II遺跡・村主遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 7 若狭 徹 1986 「保渡田東遺跡出土の土器について」『保渡田東遺跡』 群馬県教育委員会
- 8 前掲 『保渡田東遺跡』 古墳時代から平安時代にかけての集落で、奈良時代の豊富な遺物を出土している。
- 9 『三ツ木遺跡』 財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 10 『村主遺跡・大原II遺跡』 財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 11 国立館大学文学部考古学研究室 1984 『群馬県吉井町下五反田・末沢窯跡』
- 12 月夜野町教育委員会 1985 『月夜野古窯跡群』
- 13 大胡町教育委員会 1986 『上大屋・樋越地区遺跡群』
- 14 相京健史 1982 「群馬県の古窯跡群の概観」「天代瓦窯遺跡」 中之条町教育委員会
- 15 大江正行 1984 「群馬県における古代窯跡群の背景」『群馬文化』 199号
- 16 中沢 悟 1985 「群馬県内における古窯跡の概要について」 前掲書 註12
- 17 註14~16にあるとおり、県内の窯跡については9または10群に分類されており、3つの地域に大別することに意義は認められないが、ここでは集落に近接する窯業地域を大まかに記すために使用した。
- 18 未報告 前掲書 註1に引用された。
- 19 西部の窯跡群の須恵器には特徴的な胎土から産地を推定できるものがあるが、これが東毛の遺跡で確認される例も多い。秋間窯跡群の他に乗附窯跡群、吉井窯跡群など、胎土による分類が大江正行氏を中心に行なわれている。
- また、埼玉県比企丘陵産の須恵器の特色である白色針状物の混入する杯も荒砥上川久保遺跡5区5住等に出土している。
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 『荒砥上川久保遺跡』
- 20 酒井清治 1986 「北武藏における7・8世紀の須恵器の系譜について」『研究紀要 第8号』 埼玉県立歴史資料館
- 21 窯跡出土資料としては栃木県北山1号窯の出土例があるが一地点だけの報告で量産されていたとは断じ難い。
- 22 集落出土資料には三ツ木遺跡 109住がある。
- 23 金子真土 1982 「北武藏の須恵器」『研究紀要 第4号』 埼玉県立歴史資料館
- 24 埼玉県遺跡調査会 1974 『前内出窯址発掘調査報告書』
- 25 当日の討論では年代に対する異論も数多く出された。また1号・2号窯を同時期として扱う提唱も合意はえられなかった。
- 26 前内出窯の資料は下記の論考から1~2点のみの少数資料を除いてそのまま引用した。
- 金子真土 1984 「埼玉における古代窯業の発達(6)」『研究紀要 第6号』 埼玉県立歴史資料館
- 27 人間市教育委員会 1984 『八坂前窯跡』
- 28 群馬県歴史博物館の常設展示品となっている。
- 29 前掲書 註22による。
- 30 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 『鳥羽遺跡 I』
- 31 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『小角田前遺跡』
- 32 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 『大釜遺跡・金山古墳群』
- 33 大西雅之 「ロクロ左回転の須恵器」 前掲書32
- 34 表は単位cm。表6・7の△は削り高台の杯、表8・9の■は糸切り痕のない杯、表12の○は高台付き杯を示している。